

大学への帰属感と大学生生活充実度を高める教育プログラムの開発

著者名(日)	佐久田 祐子, 奥田 亮, 川上 正浩, 坂田 浩之
雑誌名	大阪樟蔭女子大学研究紀要
巻	4
ページ	15-22
発行年	2014-01-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1072/00003866/

大学への帰属感と大学生生活充実度を高める教育プログラムの開発

心理学部 心理学科 佐久田祐子
心理学部 臨床心理学科 奥田 亮
心理学部 心理学科 川上 正浩
心理学部 臨床心理学科 坂田 浩之

要旨：大学生生活に対する充実感を感じるためには、学生の大学への帰属感が高まることが重要である（佐久田他，2008）。このため筆者らは、先輩が語る VTR や教員の対談を交えた帰属感高揚プログラム『心理学と私』を考案、実施し、その効果を検証してきた。本研究では、心理学系学科学生を対象とした帰属感高揚プログラム『心理学と私』を、全学学生を対象としたプログラムに拡張するため、VTR 刺激およびプログラムそのものの開発を目指すものである。全学対象の実施においては、学科混成でのプログラム実施が望まれ、そのためには特定の学科の VTR（同学科 VTR）に依存せず、一般的に同大学の先輩が語るもの（同大学 VTR）に変更した際に、川上他（2010、2011）が『心理学と私』の成果として報告した、帰属感の高揚効果が認められるか否かを検討する必要がある。そこで研究 1 では、上回生に対して同学科 VTR と同大学 VTR を共に視聴させ、これら VTR の 1 回生に対する効果の可能性について評定を求めた。研究 2 では、同学科 VTR と同大学 VTR を用いた帰属感高揚プログラムを異なる年度に実施し、それぞれのプログラムに対する印象評定を参加者に求めた。これらの結果、いずれの VTR 刺激もおおむね変わらず効果をもつこと、ただし特に一回生へのメッセージについては、学科 VTR の方が効果をもつことが示された。

キーワード：大学への帰属感、教育プログラム、大学生生活充実度、大学満足度、初年次教育、実践的研究

問題

個人のライフサイクルにおいて大学生時代は、様々な経験を通して、自分らしさや自分とはどのような人間かについて考える時期であり、社会に出るための準備期間として位置づけられる（及川・坂本，2008）。大学生時代がこのような期間となるためには、学生が大学生活にある程度適応し、満足を感じる必要がある。さらには、適応しきれていない部分や不満足な部分を抱えつつも大学生活に主体的にコミットし、充実感を感じる事が重要な意味を持つことになるであろう。たとえば、大野・茂垣（若原）・三好・内島（2004）は、先行研究を概観し、充実感尺度の得点とアイデンティティ得点との間に有意な正の相関が認められること、アイデンティティ・ステイタスにおける達成群、もしくはコミットメントの高い群（現在自己投入群など）が他の群に比較して充実感が高いことを明らかにしている。また、山田（2009）は、同志社大学高等教育・学生研究センターが実施している JCIRP（Japan Cooperative Institutional Research Program）

の日本版大学生調査（JCIRP College Students Survey；JCSS）を用いた国公立 4 年制大学 8 校の学生 3,961 人を対象とする調査の分析結果から、学生のラーニング・アウトカムを上昇させるには、大学生活全体が充実するような学生のエンゲージメントが不可欠であることを論じている。

近年、大学への適応の困難な学生が増加しているとの指摘がある（e.g. 谷島，2012）。学生相談機関の調査においては、大学生のおよそ 1% 程度が不登校問題を呈することが明らかになっている（荒井・石田・大塚・岡本・兒玉，2011）。牧野（2001）によれば、1 度でも“大学に行きたくない”と思ったことのある学生に対してその理由を調べたところ、“眠いから”“疲れているから”“授業がおもしろくないから”“大学が自分が期待していたものと違うから”の順で理由があてはまる割合が高いことが明らかにされている。同様に、1 度でも“大学を辞めたい”と思ったことがある学生に対してもその理由を調べたところ“大学が自分が期待していたものと違うから”“授業がおもしろく

ないから” “大学でやりたいことが特にないから” “他にやりたいことがあるから” の順に理由が当てはまる割合が高いことが明らかにされている (牧野, 2001)。

坂田・佐久田・奥田・川上 (2005, 2006)、佐久田・奥田・川上・坂田 (2008, 2012) は、大学教育が十全に実践されるためにはその初動時における体制の確立が重要であると考え、多くの大学において大学教育初動時に行われている、大学・学部・学科に関する様々な情報を提供したり、学部の専門性を伝えるような初期教育を行ったり、同級・上級生や教員らと関係を結んだりするような場や機会である“新入生オリエンテーション (Fresher Orientation Program 以下略して“FOP”と表記する)”が新入生の大学生活充実度に及ぼす効果について検討している。坂田他 (2005) では、大学の新生が FOP に何を期待し、またそれに参加してどのようなことを獲得したと感じているかについて、同大学同学科 (心理学系学科) の異なる年度 (すなわち異なる実施形態) で行われた FOP を比較し検討を行った結果、①FOP が 1 泊 2 日で行われること (内容が豊かになること) と ②FOP において“大学生活”情報を提示することという二つの点が、“FOP が大学への帰属感を高める行事であり、大学 4 年間で過ごす上での大切な情報を獲得できる機会である”という学生の認識を確かなものにする効果を持つことが明らかにされている。坂田他 (2006) では、同大学同学科 (心理学系学科) の単年度のデータを用いて、FOP に参加して獲得したと感じていること (獲得感) が、大学生活充実度にどのように影響しているかを、共分散構造分析を用いて検討した結果、FOP における獲得感が、大学生活充実度を高めていることが明らかにされ、またこうした獲得感には、教員との親密化や帰属感高揚が強いかかわっていることが示唆されている。この知見は、同大学同学科 (心理学系学科) の 4 年度分のデータを用いて検討した佐久田他 (2012) においても支持されている。さらに佐久田他 (2008) では、同大学複数学科のデータを用いて検討した結果、FOP に参加して帰属感が高揚することが大学へのフィット感や学業満足度を高めることが明らかにされている。

以上の知見から、学生が大学生活に主体的にコミットし、充実感を感じられるようにするためには、学生の大学への帰属感を高めることと、教員とのつながりを強めることが重要なポイントであることが強く示唆される。

また、4 月から 7 月までの間に大学新生の不適応感が有意に増大するという報告 (水野・田積・炭谷・多胡, 2007) や、FOP において帰属感が高まらなかつ

た新生や教員との親密化が得られなかった新生は、FOP 後約 1 ヶ月の間に大学に対する“フィット感”が低下するという知見 (佐久田・奥田・川上・坂田, 2007)、1 回生から 2 回生のところで大学満足度の大きな落ち込みが見られるという知見 (木村, 2012)、“大学意欲低下”は入学期から 2 回生に上がるにつれて高くなるという知見 (溝上, 2004) などがあり、学生の不適応感を軽減させ、大学生生活充実度を高めるためには、初年次において、初動時の FOP のみでなく、その後も帰属感や大学生生活充実度を高める教育を展開していく必要があるといえる。

筆者らはこれらの検討を踏まえ、大学への帰属感と大学生生活充実度を高める教育プログラムの開発に着手し、まず心理学系学科に所属する 1 回生を対象とする「帰属感高揚プログラム『心理学と私』」を考案・実施し、その効果を検証しつつ改良している (川上・坂田・佐久田・奥田, 2010, 2011, 2012a, 2012b)。

『心理学と私』のプログラム内容については、先行研究にてその詳細が報告されている (川上他, 2012b) ため、概略のみを紹介する。プログラムの目的は、心理学を学ぶことや心理学系学科で学ぶことの効用を伝えつつ、教員や上回生、卒業生とのつながりの意識・親密感を高めることによって、在学生の学部・学科に対する帰属意識を高揚させることである。

プログラムは、心理学とのかかわりに関する卒業生・在學生へのインタビュービデオ (VTR) と、教員同士の対談から構成されている。VTR 内容は、①心理学系学科の上回生や卒業生複数名が、「心理学を学ぼうと思ったきっかけ」「心理学に対する印象の変化」「心理学を学んで良かったこと・役立ったこと」「学生生活で一番心に残ったこと・しんどかったこと」「1 回生へのメッセージ」に関して、一問一答インタビューに答えた内容を収録したもの、②「ゼミ風景」として、実際に大学でゼミが行われている現場の映像を収録した映像、③心理学系学科卒業生が実際に職場で働いている様子の映像である。教員同士の対談については、特段打合せをせず、ライブ感を大切にしよう心がけ、3 名の教員が参加して、対談をする。教員自身が心理学を学んだきっかけ、教員それぞれが考える心理学を学ぶ意義やその途中で越えなければいけないハードルなどについて、フリートークをする。

この『心理学と私』の効果を測定したところ、プログラムの前後で帰属感の高揚が確かに認められ (川上他, 2010, 2011)、『心理学と私』が帰属感を高めるプログラムとして有効であることが確認されている。

表1 2011～2013年度の帰属感情高揚プログラム比較

実施年度	2011年度	2012年度	2013年度
プログラム名	心理学と私	大学と私	大学と私
対象	心理学系学科1回生	心理学系学科1回生	大学1～4回生(全学科混成)
VTR種類	同学科VTR	同大学VTR	同大学VTR
プログラム構成 (VTR内容)	① 始まりの言葉・内容説明	始まりの言葉・内容説明	始まりの言葉・内容説明
	② 心理学を学ぼうと思ったきっかけVTR	学科の専門領域を学ぼうと思ったきっかけと印象変化VTR	学科の専門領域を学ぼうと思ったきっかけと印象変化VTR
	③ 心理学を学んで印象は変化したかVTR	樟蔭に来て良かったことVTR	樟蔭に来て良かったことVTR
	④ 心理学を学んで良かったこと・役に立ったことVTR	学生生活の中で一番しんどかったことVTR	一回生の今頃はどんな風に過ごしていたかVTR
	⑤ 樟蔭に来て良かったことVTR	一回生の今頃はどんな風に過ごしていたかVTR	学生生活の中で心に残っていることVTR
	⑥ 学生生活の中で一番しんどかったこと・心に残っていることVTR	学生生活の中で心に残っていることVTR	ゼミ風景VTR
	⑦ ゼミ風景VTR	ゼミ風景VTR	一回生へのメッセージVTR
	⑧ 心理学系学科卒業生職場VTR	心理学系学科卒業生職場VTR	教員の対談(教員と大学生生活等)*1
	⑨ 教員の対談(教員が心理学を学ぼうと思ったきっかけ等)	一回生へのメッセージVTR	質疑応答
	⑩ 一回生へのメッセージVTR	教員の対談(教員が専門領域を学ぼうと思ったきっかけ等)	質問紙実施・感想記入
	⑪ 質疑応答	質疑応答	—*2
	⑫ 質問紙実施・感想記入	質問紙実施・感想記入	—

*1:「教員の対談」では、3年度全て心理学系学科の教員3名が行った。

*2:2012年度と2013年度のVTRは基本的に同一であるが、2013年度では「しんどかったこと」「卒業生職場」が省かれた内容となっている。

これらの成果を踏まえた上で、筆者らは、本プログラムを学科・学部を越えて大学全体への帰属感を高めるものに拡張することを、次のステップとして目指している。しかし“大学への”帰属感情高揚に効果があるものとしてプログラムを確立させるためには、学科混成でのプログラム実施と、特定の学科の先輩たちの語りには依存しないVTRの内容に変更する必要がある。そして、その変更によっても『心理学と私』の成果と同様の帰属感情の高揚効果が認められるか否かを検討しなければならない。

このため、本研究では新たに所属大学内の様々な学科の先輩たちが語るVTRを用いた帰属感情高揚プログラム『大学と私』を実施し、これが帰属感情高揚プログラムとして機能するのかを検討する。

本研究では、まず予備的研究(研究1)として、心理学系学科の上回生に対して同学科VTR(所属大学の同一学科の先輩が語るVTR)と同大学VTR(他学科も含む所属大学の先輩が語るVTR)を共に視聴させ、1回生に対する効果の可能性について評定させる。そして帰属感情の高揚効果が、同学科VTRと同大

学VTRとで異なるのかを検討する。

次に研究2として、実際に1回生に対して『心理学と私』および『大学と私』を実施し、それぞれでVTRに対する印象評定を測定して、プログラムとしての効果を検討する(なお、研究2で報告するのは、「2011年度『心理学と私』:心理学系学科学生対象」、「2012年度『大学と私』:心理学系学科学生対象」、「2013年度『大学と私』:多学部学生対象」として実施されたプログラムから採取されたデータである。これら3年度のプログラムの違いについては、表1を参照のこと)。

研究1:予備的研究

目的

研究1(予備的研究)においては、VTR呈示が1回生に対して及ぼすであろう効果について吟味するため、上回生に対して同学科VTRと同大学VTRを共に視聴させた。これらVTRが、1回生に対してどの程度効果を持つかという可能性について評定させることで、帰属感情の高揚効果が、同学科VTRと同大学VTRとで異なるのか否かを検討する。

方法

調査時期 2013年1月に調査は実施された。

被調査者 大阪樟蔭女子大学心理学系学科に所属する3・4回生27名(平均年齢21.1歳、 $SD=0.62$)が調査に参加した。

評定項目 プログラム内で呈示されるVTR及びプログラム内容の印象を評定する“誇り(誇らしかった、励まされた、嬉しかった、共感できた)”“不安(不安になった、怖くなった、落ち込んだ)”“やる気(やる気が出た、面白かった、引き込まれた、退屈だった[逆転項目])”の3下位尺度(計11項目、5件法)からなる尺度(川上他, 2010)を用いた。

刺激材料 専門領域を学ぶきっかけと学んでの印象変化(きっかけと印象変化)、本学に来て良かったこと(良かったこと)、大学生活で印象に残っていること・しんどかったこと(大学生活)、1回生へのメッセージ(メッセージ)の4つのトピックについて、心理学系学科に所属する上回生や卒業生が出演して語るVTR(同学科VTR)と、所属大学の様々な学科の上回生や卒業生が出演して語るVTR(同大学VTR)とが作成された。いずれのVTRも、上回生や卒業生に行った一問一答インタビューの録画映像から作成された。これらはいずれも、専門領域を学ぶことや大学生活を経ることで個人にいかなる変化が見られるのかを映像で呈示し、大学生活との関連の上で自己の将来像を描かせること、大学への帰属感が高まることを意図して作られている。

手続き 被調査者は、15名程度の集団で調査に参加した。VTR刺激を呈示する順序として、2種類のものを用意し、2つの被調査者集団に対して呈示することで順序効果の相殺を意図した。いずれの被調査者集団に対しても、それぞれのVTR刺激を呈示し、VTR毎に11項目の評定尺度による評定を求めた。

結果と考察

VTR毎に川上他(2010)に倣い、“誇り”、“不安”、“やる気”の3下位尺度を各項目に対する平均評定値によって構成した。“誇り”、“不安”、“やる気”の各下位尺度について出演者(2:同学科VTR・同大学VTR)×内容(4:きっかけと印象変化・良かったこと・大学生活・メッセージ)の2要因分散分析を実施した。

“誇り”については、内容の主効果($F(3, 78)=15.16, p<.01$)は認められたが、出演者の主効果($F(1, 26)<1, n.s.$)、両者の交互作用($F(3, 78)=2.17, n.s.$)は認められなかった(図1)。

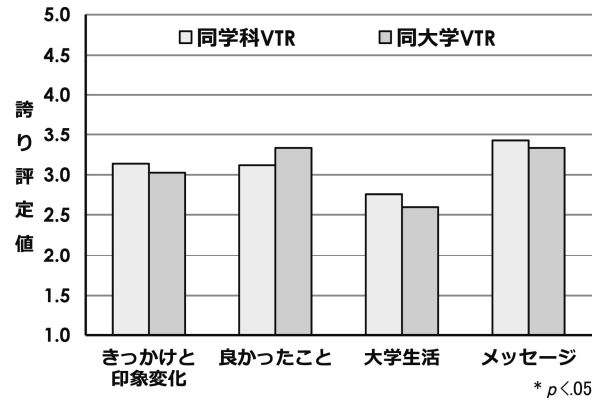


図1 各VTRの印象評定(誇り)結果

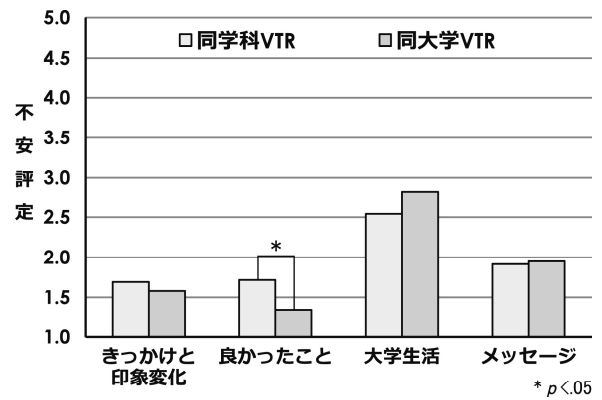


図2 各VTRの印象評定(不安)結果

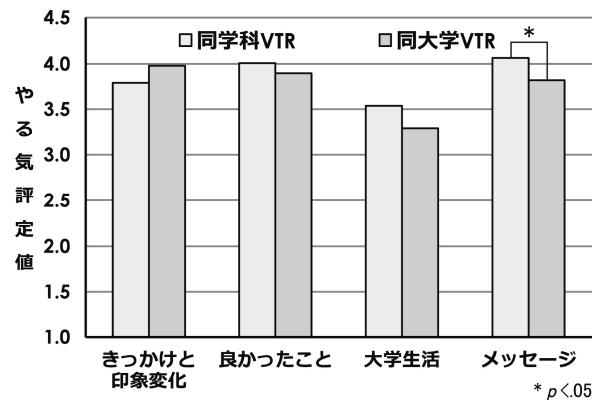


図3 各VTRの印象評定(やる気)結果

“不安”については、内容の主効果($F(3, 78)=18.16, p<.01$)、両者の交互作用($F(3, 78)=3.42, p<.05$)は認められたが、出演者の主効果($F(1, 26)<1, n.s.$)は認められなかった。単純主効果検定の結果「良かったこと」VTRは同大学VTRの方が同学科VTRより不安を高めにすることが示された(図2)。

“やる気”については、内容の主効果($F(3, 78)=12.57, p<.01$)、両者の交互作用($F(3, 78)=2.84, p<.05$)は認められたが、出演者の主効果($F(1, 26)=1.29, n.s.$)は認められなかった。単純主効果検定の結果「メッセージ」VTRは同学科VTRの方が同大学VTRよりやる気を高めやすいことが示された(図3)。

以上より、「この大学に来て良かったこと」を語る VTR については他学科も含めた同大学の先輩のものが不安を高めず、「1 回生へのメッセージ」を語る VTR については同学科の先輩のものがやる気を高めることが示唆された。

研究 2：3 年度分の帰属感高揚プログラム比較

目的

本研究では、研究 1 の結果を踏まえ、同学科 VTR、同大学 VTR それぞれが、実際のプログラムにおいて一回生にどのように評価されるのかを検討する。具体的には、2011 年度の心理学系学科 1 回生に同学科 VTR を、2012 年度の心理学系学科 1 回生に同大学 VTR をそれぞれ帰属感高揚プログラムで視聴させ、VTR に対する評価を行わせることで、これを比較する。加えて、帰属感高揚プログラムが特定の学部・専門領域内での実施にとどまらず、全学的に実施可能な内容へと発展させるため、2013 年度の複数学科の学生を被調査者とし、同大学 VTR を視聴させてその効果を検証する。

方法

調査時期 2011 および 2012 年度は 11 月下旬～12 月初旬、2013 年度は 7 月下旬にそれぞれ授業時間内に実施した。

被調査者 大阪樟蔭女子大学心理学系学科 2011 年度 1 回生 46 名（平均年齢 18.8 歳、 $SD=0.90$ ）、2012 年度 1 回生 63 名（平均年齢 18.5 歳、 $SD=3.21$ ）、2013 年度全学部学科の 1～4 回生 40 名（平均年齢 18.7 歳、 $SD=0.85$ ）が参加した。

刺激材料 研究 1 と同様の 4 トピックについて、2011 年度プログラムでは、心理学系学科に所属する上回生や卒業生が出演して語る VTR（同学科 VTR）を、2012 年度プログラムでは同様の内容について所属大学の様々な学科の上回生や卒業生が出演して語る VTR（同大学 VTR）を用いた。また、2013 年度プログラムでは、同大学 VTR のうち、「しんどかったこと」のみ除外したものをを用いた。これは、研究 1 において「大学生活において印象に残っていること・しんどかったこと」に対する不安の評価値が他の VTR に対するものと比べて高かったためである（図 2）。

いずれの年度のプログラムにおいても、心理学系学科におけるゼミ授業場面を撮影したものを、共通のゼミ風景 VTR として上記それぞれの VTR に加えた（表 1）。また、卒業後の進路の実例を示すために、心

理学系学科卒業生が実際に職場で活躍している風景の VTR*1 も併せて呈示した。

帰属感高揚プログラム プログラムでは、進行役を複数名の教員が担当し、主に上回生や卒業生が出演する VTR を呈示した後、教員による自身の心理学の学び（2012、2013 年度は大学の学び）の呈示と教員同士の対談を行なった。

評価項目 プログラム内で呈示される VTR 及びプログラム内容の印象を評定する“誇り”“不安”“やる気”の 3 下位尺度（11 項目、5 件法）からなる尺度（川上他，2010）を用いた。

手続き 帰属感プログラム終了後、プログラム内で呈示された VTR を「一回生へのメッセージ」「ゼミ風景」「その他」の 3 つに大きく分けて、それぞれの印象を評定させた。また教員同士の対談についても同様に評価を求めた。

結果

単一学科に対する同学科 VTR、単一学科に対する同大学 VTR、複数学科に対する同大学 VTR（ただしゼミ風景 VTR については共通）とで、その評価が異なるか否かを 1 要因分散分析により検討した。具体的には「メッセージ VTR」「ゼミ風景 VTR」「その他 VTR」「教員の対談」のそれぞれに対する“誇り”“不安”“やる気”の評定平均値を算出し（図 4～図 6）、プログラム（2011 年度：単一学科に対する同学科 VTR・2012 年度：単一学科に対する同大学 VTR、2013 年度：複数学科に対する同大学 VTR）の違いを吟味した。その結果、“やる気”を従属変数とした場合の「メッセージ VTR」におけるプログラムの主効果（ $F(2,145)=10.12, p<.01$ ）、「その他 VTR」におけるプログラムの主効果（ $F(2,144)=8.71, p<.01$ ）および「教員の対談」におけるプログラムの主効果（ $F(2,145)=10.97, p<.01$ ）がそれぞれ 1%水準で見られた。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「メッセージ VTR」と「その他 VTR」については 2011 年度が他の年度よりも高く、「教員の対談」については 2011、2012 年度が 2013 年度よりも高いことが明らかとなった。「ゼミ風景 VTR」の主効果は有意ではなかった（ $F(2,145)=2.00, n.s.$ ）。

一方、“誇り”を従属変数とした場合（メッセージ：

*1 2013 年度は被調査者が複数学科にまたがっており、卒業後の進路が学科間で大きく異なることから、特定学科卒業生の職場活躍風景を呈示することは避けた。

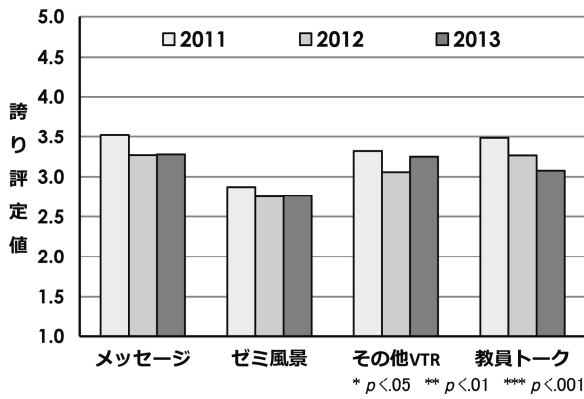


図4 プログラムに対する「誇り」評定値

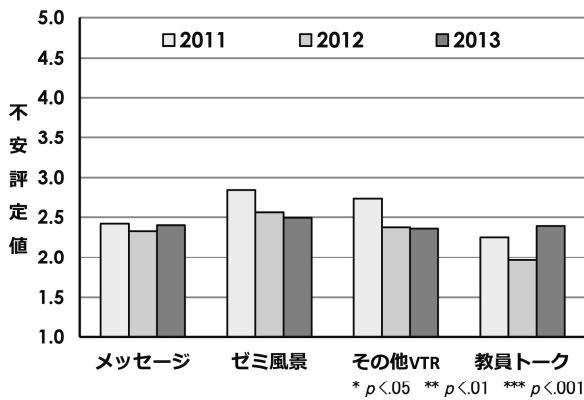


図5 プログラムに対する「不安」評定値

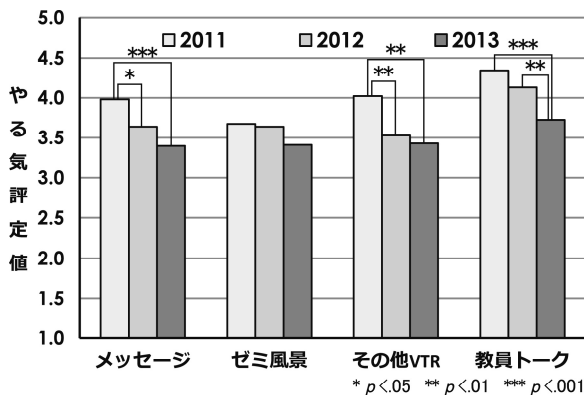


図6 プログラムに対する「やる気」評定値

$F(2,145)=2.23$, ゼミ風景： $F(2,145)<1$, その他： $F(2,144)=1.98$, 教員の対談： $F(2,145)=2.70$, 全て *n.s.* および“不安”を従属変数とした場合（メッセージ： $F(2,145)<1$, ゼミ風景： $F(2,145)=1.82$, その他： $F(2,144)=2.53$, 教員の対談： $F(2,145)=2.81$, 全て *n.s.*）、いずれのプログラム間にも有意差は認められなかった。

考察

本研究では、帰属感高揚プログラムの一環として呈示するVTRが、視聴する学生と同一所属の先輩が出演するものが良いのか、所属以外の学科の先輩も幅広

く出演した場合に効果に変化はあるのかを検討することが主な目的であった。分析の結果から、自分の所属する学科の先輩のみが出演するVTRの方が“やる気”を高めることが明らかとなった。同学科VTR、同大学VTRのいずれにおいても、出演者は入学前と入学後の学科での学びのイメージが変わったということ、中学・高校時代に抱いていた興味関心が現在の所属学科選択へのきっかけとなっていることなど、共通する内容を語っていた。所属学科以外の先輩も所属学科の先輩と同様の考えを持っていると知ること、大学に対する所属意識や安心感が高まり、ひいては“やる気”を高めるという可能性もあったが、実際には“やる気”に限って言えば、自分が所属する学科の先輩による声の方がより影響力を持つことが示された。

一方で、“誇り”“不安”についてはVTRの違いによる有意差が見られなかった。つまり、これらに関しては所属以外の学科の先輩による声の影響力も、所属学科の先輩と同等であると考えられる。

2013年度同大学VTRでは、2012年度同大学VTRから「つらかったこと・しんどかったこと」について先輩が語る部分を省いたにもかかわらず、“不安”評定値は低くならなかった。これについては2013年度の調査対象者が1回生のみではないこと、複数学科が対象であったことなど、いくつかの要因の影響も考えられる。いずれの年度も平均評定値は中間値を超えてはいないが、可能な限り不安を煽らず、やる気や誇りを高めるプログラムを目指す上で、この点は慎重に検討していく必要がある。

「ゼミ風景VTR」については、同一刺激映像に対して2011年度と2012年度は同一属性の被調査者、2013年度は異なる属性の被調査者が視聴するという条件であったため、特に2013年度のVTR評定結果に注目していた。具体的には、2013年度の多数の被調査者にとって、自身の所属する学科ではないゼミ風景VTRを視聴することが、何らかの良い効果をもたらし得るのかという危惧があった。しかし分析結果からは、自身が所属する学科のゼミ風景を視聴した2011年度および2012年度の印象評定値と有意差が見られず、2013年度の“やる気”の評定値も中間値を超えた。ゼミ所属前の学生にとって、「ゼミとはどのようなものなのか」という疑問は学科や専門領域を超えたものであり、これに答える形でゼミ風景を映像で呈示することは、勉学全般に対する意欲、やる気の向上につながることを示唆される。

帰属感プログラム内の教員による対談については、

分析の結果、2011、2012年度の方が2013年度に比べて“やる気”を高めることが示された。すなわち自身が所属する学科の教員による対談の方がやる気を高めた。対談の内容は、ライブ感を重視するためシナリオはなくプログラムごとに発言内容も異なっていたが、大筋では一貫していた。しかし、2013年度の被調査者にとって、帰属感プログラム実施者兼対談者は、その日初めて出会ったという場合がほとんどであった。このことから、教員の対談が学生に及ぼす効果は、事前の当該教員との親近性の影響を大きく受けることが示唆される。

結論と今後の課題

研究2において、帰属感高揚プログラムに用いる映像刺激は、所属学科の先輩のみが出演する場合と同様に、様々な学科の先輩が出演する場合も効果をもつこと、また、それを様々な学科の学生が視聴しても、ほぼ同等の効果をもつことが明らかとなった。ただし、先輩が1回生に向けて贈るメッセージについてのみ、自分と同じ所属の先輩によるもののほうが、よりやる気を高めることも明らかになった。このことは、上回生によるビデオ評定結果(研究1)とも一致している。また、教員の対談については2013年度の評価が他の年度と比べて高くないことから、事前の教員との親近性の効果が示唆された。以上より、帰属感高揚プログラムを全学的に実施する場合、先輩からのメッセージVTRを工夫することと、対談者となる担当教員の選定や事前に担当教員との親近性を高める工夫について検討することが必須である。

本プログラムは大学への帰属感を高揚させることが主目的である。しかし、2013年度は全学的な実施に向けてのパイロットスタディであったことから、被調査者数も少なく、参加者の学年にも幅があり、VTRと対談の評定を検討するにとどめた。2011年度と2012年度の各プログラム前後における参加者の帰属感の変化に関しては、いずれもプログラム参加前に比べて参加後の帰属感が高まることが明らかにされている(坂田・佐久田・奥田・川上, 2013)。本研究の結果を反映させる形で2013年度プログラムを改良して、全学的に実施し、本プログラムが1回生の大学への帰属感を高めることを確認することが今後の課題である。

引用文献

荒井佐和子・石田弓・大塚泰正・岡本祐子・兒玉憲一(2011). 不登校大学生に対する大学教員の視点と

支援 広島大学心理学研究, 11, 339-347.

川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮(2010).

大学への帰属感高揚プログラムの探索的開発 日本教育心理学会第52回総会発表論文集, 397.

川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮(2011).

大学への帰属感高揚プログラムの探索的開発(2) 日本教育心理学会第53回総会発表論文集, 322.

川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮(2012a).

大学への帰属感高揚プログラムの探索的開発(3) 日本心理学会第76回大会発表論文集, 1137.

川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮(2012b).

心理学部における帰属感高揚プログラム「心理学と私」大阪樟蔭女子大学研究紀要 2, 105-112.

木村拓也(2012). 大学満足度の学年変化とその規定要因の探索—項目反応理論(IRT)とInterruptive Structural Modeling(ISM)を用いた分析—クオリティエデュケーション, 4, 73-92.

牧野幸志(2001). 大学生の不登校に関する基礎的研究(1)—大学生の不登校と退学希望の理由の探索—高松大学紀要, 36, 79-91.

溝上慎一(2004). 大学新入生の学業生活への参入過程: 学業意欲と授業意欲. 京都大学高等教育研究, 10, 67-87.

水野邦夫・田積徹・炭谷将史・多胡陽介(2007). 大学新入生の大学適応を促進する授業プログラムの検討 聖泉論叢, 15, 125-140.

及川恵・坂本真士(2008). 大学生の精神的不適応に対する予防的アプローチ—授業の場を活用した抑うつ的一次予防プログラムの改訂と効果の検討—京都大学高等教育研究, 14, 145-156.

大野久・茂垣(若原)まどか・三好昭子・内島香絵(2004). MIMICモデルによるアイデンティティの実感としての充実感の構造の検討 教育心理学研究, 52, 320-330.

坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩(2005).

オリエンテーション形態が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 4, 75-86.

坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩(2006).

新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生活満足感との関連性について 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 6, 59-71.

坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩(2013).

大学への帰属感高揚プログラムの探索的開発(6) 日本心理学会第77回大会発表論文集, 1104.

佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之 (2007).
新入生オリエンテーションに関する研究 (3)
—オリエンテーション成果が大学生活充実度の変
動に及ぼす影響— 日本心理学会第 71 回大会発
表論文集, 1169.

佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之 (2012).
新入生オリエンテーションに関する研究 (6)
—オリエンテーション成果が大学生活充実度の変
動に及ぼす影響 (2)— 日本心理学会第 76 回大
会発表論文集, 1134.

谷島弘仁 (2012). 大学生における大学への適応に関
する検討 人間科学研究, 27, 19-27.

山田礼子 (2009). 学生の情緒的側面の充実と教育成
果—CSS と JCSS の結果分析から— 大学論集,
40, 181-198.

* 本研究は 2012 年度大阪樟蔭女子大学特別研究助成
費の助成を受けて行われたものである。

Development of an Education Program to Boost Identification with the University and University Life Satisfaction

Faculty of Psychology, Department of Psychology

Yuko SAKUTA

Faculty of Psychology, Department of Clinical Psychology

Akira OKUDA

Faculty of Psychology, Department of Psychology

Masahiro KAWAKAMI

Faculty of Psychology, Department of Clinical Psychology

Hiroyuki SAKATA

Abstract

Sakuta, Okuda, Kawakami, & Sakata (2008) showed that sense of identification with the university leads to university life satisfaction.

We have been searching for the effective Identification-Boost-Program of University named “Psychology and I” for freshers of Department of Psychology. In this study, to expand the program to all freshers in the university, we examined applicability of the program including VTR stimuli to show to freshers.

In Study 1, non-freshers (as participants) watched both the same major VTRs and the general version VTRs, and were asked to estimate the possibility of the effect to boost the sense of identification with the university.

In Study 2, we carried out Two Identification-Boost-Programs, once using the same major VTRs and once using the general version VTRs for students in different fiscal year. They were asked to report their impression to each program.

The results showed that both of the VTR stimuli boosted their sense of identification with the university in general; however, the same major VTRs are more effective especially conveying the message to freshers.

Keywords: sense of identification with the university, education program, university life satisfaction, university satisfaction, first year experience at universities and colleges, practice study